

「兵器ハ永遠ニモタスベシ」南部 麒次郎の功罪

はじめに)

昨年、ワシントン郊外、NRA（ナショナル・ライフル・アソシエーション）博物館を訪れた際に、「ナンプコーナー」が出来ていたので驚いた。またスプリングフィールドアーマリーにも同じようなものが出来ていた。第二次世界大戦ベテラン寄贈品を展示したものだ。アメリカで今、旧日本兵器は人気がある。小銃を「アリサカ」、拳銃、機関銃を「ナンプ」と総称している。

以前、帝国陸軍技術本部におられた伊藤 慎吉氏にお会いし半日お話を聞いた。主に帝国陸軍の兵器史、制度、そして成功と失敗の話だった。

同氏は帝国陸軍の代表的兵器開発者「南部 麒次郎」に対して必ずしも肯定的でなく、「功罪があった」と述べていた。南部は主に小火器の開発を行い、主なる日本の小火器は拳銃、小銃、機関銃、対空砲、多くは南部の設計であった。但し 1930 年代後半、南部開発機構では不足、世界各国の技術を取り入れた。

話はもどり伊藤氏は南部の設計は独特なる機構をもち品質は高い、しかし大量生産となるとコストが下がらずそこに問題があったと。

南部自身は「兵器ハ永遠ニモタスベシ」と言っているように、極端に言えば兵器は消耗さ



せるものではないと言う考え方だったからだ。

南部 麒次郎

1、南部 麒次郎の系譜

南部は戦後「或る兵器発明家の一生」と言う自伝を記しそれに詳しく彼のことは述べられている。自伝はともすると、「私の履歴書」的になり、自慢がほとんどをしめ、当てにならない内容になるが、この本は謙虚で、客観性があり、失敗談、苦労話が多いので研究には

役にたった。出身は明治になってからの鍋島藩、地方士官学校から軍歴に入った。但し兵器や技術の専門的勉強はしてなかった。日清戦争では砲兵で実戦を体験、それから砲兵学校を経て、東京砲兵工廠小銃製作所に赴任した。その転勤の理由を、本人は「室内射撃盤」「間接射撃法」を研究したからでないと推察していた。明治の人事はフレキシブルであった。日本の小銃製作は、村田 経芳（つねよし）薩摩藩出身（1838－1921）、有坂 成章 岩国藩出身（1853－1915）、そして南部 麒次郎（きじろう）（1869－1949）と続く。村田は明治初期国産銃開発、有坂は日露戦争に使われた「三十年式小銃」開発。南部を加えこの三

人が日本の著名な小火器開発者であったが、年齢的には各々15－16歳の差。大組織においてはこの年齢差は直接多くの接触があったとは考えられない。ちなみに1900年において村田62歳、有坂47歳、南部31歳であった。南部は三十年式小銃製造のため大わらわになっていた工廠で外国から届いた機械の据え付け、製造方式の決定、必要用具の製作など、有坂と南部の間に位置した小銃製作所所長宮田少佐の補佐をした。宮田少佐は技術の天才であり、さまざまな科学的手法を取り入れた。南部は宮田から多大の影響を受けたと自伝に書いた。

やがて日露戦争中の明治三十七年（1905）、南部は宮田の後を継ぎ小銃製作所所長に就任、三十年式小銃の品質向上、生産増強に励んだ。職人を全国より集めた。江州、信州から銃工の子孫であろう、優秀な熟練工が集まった。工廠は拡大し、生産は順調に推移、戦場から戻った修理品作業もあり、工員は12,000人になった。南部の第一次世界大戦欧州戦線視察の記はなかなか観察眼が鋭く興味深い。ルイス機銃（後に海軍が汎用機銃として採用）をコストがかかり、機構が頑丈でないと批判していた。彼もすでに軽機関銃の独特のアイデアをあたためていたからだ。

2、南部開発の小銃



写真①上、三八式歩兵銃 6.5 mm、下、四四式騎兵銃 6.5 mm

日露戦争（1905・6）のために有坂が開発した小銃は「三十年式」（1898）として制定され、約60万挺が小石川小銃製造所で生産された。この小銃はモーゼルタイプ機関部のものだった。三十年式製造に関して南部は工廠の準責任者で生産効率、特に日産1000挺を確立する

ために尽力した。その後、南部は海軍陸戦隊用に「三十五年式」小銃を手掛けた。そして戦後直ぐに「三十八年式」小銃を開発、その機構は「九九式小銃」に受け継がれ戦後まで使用された。遊底部品が僅か4個であり、分解、組み立てが従来のモーゼルタイプよりはるかに簡単でしかも頑丈であった。「NRA アメリカンライフルマン」記事によると南部開発機構は世界で最も頑丈な煩棹式（ボルトアクション）小銃であると検査結果が書かれていた。下写真②（三八式小銃初期型の遊底 全部白磨きである）



写真③（三八式小銃中期型への装填、5発装弾子を使う）

工廠統計によれば（欠けている年もあるが）「三十八年式小銃」は総計 240 万挺、「九九式小銃」は 226 万挺生産されたと推定される。南部が陸軍科学研究所所長であった時、関東大震災、大正十二年（1923）に遭い、爾後、工廠は小倉に移転、そして名古屋にも創立された。三十八年式小銃は東京、小倉、名古屋の工廠で生産され、九九式小銃は小倉、名古屋の工廠と工廠の元、東洋工業、井澤銃砲、豊和重工、東京重機など民間会社でも生産された。東洋工業は世界最大の民間小銃工場で約 30%の生産比率であったと推定される。所内に 300m射場が幾つもあり、若年労働者の育成に力を入れたと言われていた。

（関東大震災と言う大災害は、国の安全保障に関わる重要な工廠を分散させるという策をとらせた。）

3、南部開発の拳銃

南部は 1902 年頃、当時世界で流行りになってきた自動拳銃を開発した。同時に 8mm南部弾

を開発、爾後この弾薬は日本の拳銃弾、短機関銃弾として戦後まで使用された。
初代の南部式拳銃はブローバック機構だが、複座バネが横についているのが特徴である。
従って後ろから見ると他の自動拳銃と異なり、左に筒があり左右対称でない。左右非対称
はその後の南部デザインの核となる。この拳銃には 7 mm に縮小したものもあり、「御賜の拳
銃」に使われた。



写真④南部小型拳銃

7 mm、下、写真⑤後ろから見ると左右対称でない 下、写真⑥「御賜」の刻印



しかし初代の南部拳銃は製造コストが高く、陸軍には採用されなかった。海軍陸戦隊が採用したので、「陸式」と言われ、錨の刻印がある。その後、簡略化して複座バネを左右に 2 本入れた、「十四年式」大正十四年（1925）が制定された。これは下士官、憲兵用であった。南部氏が退任してから 8 mm ながら小型の車両兵用の「九四式拳銃」が昭和十一年（1934）開発された。南部は自ら十四年式は格別優れたものではない、としていた。米国で競技を行い実験してみたが、この 2 種の命中率に大きな差はなかった。



写真⑧十四年式拳銃 8mm 前期型、昭和 6 年製造



写真⑨九四式拳銃 初期型 握りがベークライト製

九四式は評判が悪く、十四年式は良い。これは形状の問題で機構に関して九四式は優れている。戦後、米国で「アメリカンルガー」と言う射的拳銃が販売されたが、これは十四年式のコピーであった。

4、南部開発の機関銃

南部は日本の機関銃採用に最初から関わったかどうかは明らかではない。日露戦争中には機関銃に関しても新しいアイデアをだしていた。

保式機関銃はホチキス機銃を日本版にして歩兵小銃弾と同じ 6.5 mm弾薬を使うようにしたもので、明治三十年（1898）制定。後に南部が日本の機関銃の父としての地位からすると若年ながらこの機関銃を良く理解していたと推察される。

① 三十八年式機関銃 6.5 mmと三脚架

保式機関銃を改良し、真鍮製機関部と7枚の冷却版、規制子（ガスレギュレーター）を持つ形式にした。三脚架をホチキス鞍式から、二姿勢（膝折、伏せ）に調整でき、さらに三脚架から降ろさずに托架というパイプを使い、2、3、4人の兵士が運搬出来る方式にした。この三脚架は接続部が変化したが、後の九二式重機まで継承された。間接照準、位置の移動に強みがあった。第一次世界大戦勃発とともに英軍と共同作戦した青島攻撃に使用された写真が残っている。

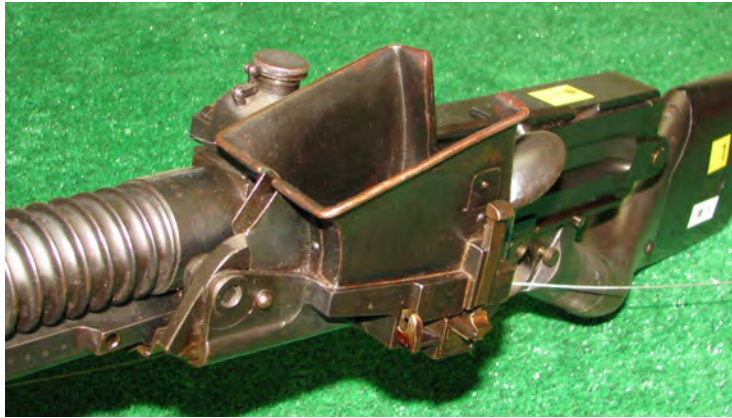


写真⑩三年式機関銃 6.5 mmと三八式三脚架と托架（大陸仕様塗装）

② 三年式機関銃（1914） 6.5 mm

大正三年に制定された三八式の改良型で、近代的な放熱筒を採用した。ホチキス方式の保弾板30発の給弾機構はそのままで、三脚架は三八式で一部使われた新しい方式にした。この機関銃は4,000挺も生産されてない。防衛図書館の資料では、第一次世界大戦中、同盟国英国より武器輸出要請があり、数十万挺の単位で小銃は輸出したが、機関銃は何度も駐日英国大使が日本国政府に要請したが輸出できなかった。余談ながら小銃弾はエンフィールド工廠で、日本の6.5 mm弾を生産した。

③ 十一年式軽機関銃 6.5 mm



写真⑪十一年式軽機の装填架 コイルスプリングで弾薬を押さえる、上は油缶
第一次世界大戦で機関銃は恐ろしい効果をあげた。しかし一か所に固定して使用するものから、歩兵と共同作戦をとる、特に分隊兵器としての役割が求められた。南部氏は弾倉も弾帯も使用せず歩兵の弾薬、装弾子をそのまま使える機構を考え付いた。装填架だ。



写真⑫十一年式軽機、銃床の曲がり

が特徴である、銃身交換は放熱筒を外して行った

これは機銃の部品、装填架という鉄板の箱に歩兵が小銃に装填する 5 発装弾子をそのまま入れることで給弾した。装填架は左側に装着され、そのために銃床は右に曲がり、後ろからみると著しく左右非対称である。装填架は 60 の部品で構成され緻密で、複雑な機構である。南部はこのアイデアを人力車に乗り、その車輪を見ていて思い付いたそうだ。機関銃手は歩兵と同じ装弾子の弾薬を持ち、お互いに供給しあった。中国戦線で多く使われたが、この軽機 1 挺は小銃 12 挺に等しい効果があると言われた。

④ 八九式航空機旋回機銃・固定機銃と 7.7 mm と同弾薬

航空機発達に応じ、昭和四年（1929）南部方式の旋回機銃が開発された。二連と単身があった。これらの機銃の弾薬が新たに開発され半起縁（セミリムド）の 7.7 mm で初めて鋼甲弾など、加工弾薬が造られた。二連機銃も単身も円盤型の弾倉を使用した。二連の弾倉は 5

発装弾子を使いセルロイド窓から残弾が見えた。この弾薬は次の九二式重機に、また後に無起縁（リムレス）にして九九式小銃や九二式重機、航空機固定機銃にも使用された。一方海軍では、航空機機銃に英国の.303を採用したので、同じ 7.7 mm弾薬でも陸海軍で互換性がなくなったまま戦争を終えた。（大日本帝国の軍隊は天皇が統帥し陸軍と海軍は別な軍であったと言っても過言ではない。）

⑤ 九二式重機関銃 7.7 mm

日中戦争、第二次世界大戦中の日本陸海軍の主力、地上用機関銃で、三年式を拡大した。引き金を押し金として、眼鏡を付けた。約 5 万挺が生産されて、各地でまた戦後も中国内戦、朝鮮戦争などに出現した。



写真⑬九二式重機（南方仕様

塗装）三年式機関銃と握りが異なる、普段は折りたたんでおく

⑥ 九六式軽機関銃 6.6 mm ⑦九九式軽機関銃 7.7 mm

1920 年代後半から 30 年代にかけて、チェコ、ブレン（英国）で出現した軽機関銃は上に箱型弾倉を立て給弾するものだった。

写真下⑭九六式軽機 6.5 mm、弾薬が先細りなので弾倉が湾曲している



写真⑩九九式軽機 7.7 mm、防盾、銃口蓋、銃剣などフル装備

日本でもホチキス系統であり、昭和十一年（1936）南部の会社が箱型弾倉を使う、規制子（ガスレギュレーター）がある、左が目視、右が眼鏡という照準の軽機を開発した。これは銃身の取り付けだけが新しい形の 7.7 mm、九九式（1939）になる。両方で数万挺が生産された。（南部はすでに自分の会社を設立しており、他社、工場との技術入札方式で採用された。）

⑧ その他、車載機銃 13. 2 mm



、九八式対空機銃 20 mmは南部方式であった。写真⑰九八式
20 mm対空機砲の砲身のみ、大変珍しい例である

5、工廠から民間企業に人材を

日露戦争が終わり、兵器需要は極端に減った。南部は工廠の有能な人材を民間会社に放出した。秘匿事項もあったろうが、民間企業の育成が重要と考えたと「兵器技術教育史 百年」にある。工廠だけで自国武器兵器の開発や生産がいずれ行き詰ることは明らかであり、この人材は社会のあらゆる部門に広がり、日本産業の技術水準をあげ、大きな影響を与えた。

自らも大正十三年(1924)、軍役退任後 商社とともに泰平商会(日本製武器兵器輸出会社)の顧問と務めながら教練機材の会社「南部銃製造所」を興した。会社、工場は国分寺にあり、7分の8年少者用教練小銃(一種の自転するスラグ弾を使う)、軽機関銃(ブローバック方式)を開発して学校教練用に販売した。また各種実用兵器の開発を上記の如く行い、採用された。戦時中は拳銃、航空機機関銃を生産した。



写真⑱南部開発系の訓練用

機関銃、南部は特許類を細かく取っていたが、民間会社が模倣品を製造しても大目にみていた

まとめ)

南部の功罪はいろいろあるが、まずは兵器開発において日本独特の合理性を発揮したことだ。その例は分隊兵器としての「十一年式軽機」に現れており他の分隊歩兵弾薬をそのまま使用する、この考えは現在のミニミ軽機にも受けつがれている。射撃訓練で使用した三十八年式小銃の手入れをする。どうしても汚れは取れない。2-3日して拭うとまた汚れていると納得しない。この理由は恐らく、金属への化学反応であろうが、それが気に入らない。なぜなら兵器は消耗品ではなく、永遠にもたすべきものであったからだ。(余談ながら九九式小銃は戦争末期の生産までもクロームメッキを施した) 南部の思想はそれだけにユニークさと品質にこだわった。「兵器ハ永遠ニモタスベシ」の思想は兵器を消耗品と考える近代戦闘では的をえていないとの批判はあるが、兵器や装具を丁寧に扱うは基本である。第一次世界大戦の視察で、英、仏を廻り「生産が民間工場で大々的に行われている」ことの効率性、可能性を見抜いていた。その事実は日本でも1930年代になり現実のものとなったが、欧米先進国では当然の仕組みだった。南部は同じ時期、欧米で活躍した発明家、エジソン、ベル、ライト兄弟などと同じような資質を持っていただろう。日本の兵器開発と言う分野で、日本の兵器しか開発しなかったが、もし世界規模で活躍する機会があれば、彼の開発した兵器の生産数は二桁大きなものになっただろう。

以上



写真⑭十年式擲弾筒 50 mm

南部社の製作が多い、4つに分解し、全てが筒に収まる設計は南部と推定して良い

協力：

伊藤 慎吉元帝国陸軍技術本部大尉

陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校小火器館

防衛省図書館

参考文献：

南部 麒次郎著「或る兵器開発者の一生」天竜出版 昭和 28 年

工華会編 「兵器技術教育百年史」

アメリカンライフルマン誌

須川 薫雄著「日本の軍用銃と装具」

須川 薫雄著「日本の機関銃」

写真①－③ 「日本の軍用銃と装具」より

写真④－⑭ 武器学校小火器館にて撮影